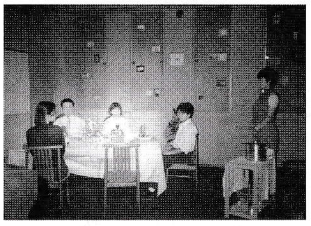
AMUSEMENT SQUARE

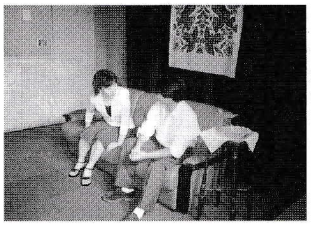
stage

演劇空間 スペースベン
表現よ、もっと自由であれ

〈文／スペースベン代表・田中勉〉

先日、9月10日から12日までの3日間、スペースベンに於いて、第9回青森県民文化祭演劇部門参加作品、長尾広海作、テアトロベーによる「そして誰かがいなくなった」を上演した。





テアトロベーとしては前回、大世紀末演劇祭に参加した作品、「パズル」に続く2作目であったが、基本的には劇団としてのスタイルではなく、プロデューススタイルをとっているので、役者のメンバーは、多少入れ代わっており桶田佳子、音喜多昭吾、安達良春を新たに加え、更に前作にも出演した、山田景子、長尾広海、田中勉のメンバーでの公演であった。

劇団スタイルでの公演と、プロデューススタイルでの公演との違いは何なのであろうか…。

基本的に、いいものを創ろうとすることに何の違いもあるはずはないことは確かであろう。

しかしながら、劇団を運営し、参加している人間の中に、無意識であれ、意識的であれ、劇団としての「色」や、「枠」を設定したとするならば、果たして演劇として、自由な表現が創出され、舞台にのせることができるのか？はなはだ疑問である。

様々な劇団が旗揚げされ、何年か後には活動が停止してしまったり、自然消滅や解散していくという状況を見ていると、やはり、主宰する者と、その仲間達の意思のズレ、表現したいもののズレが発生した中で、そういう現象が出てくるのではないかという気がしてならない。

「手を抜く」ということではなく、もっと楽に、また楽しく、もっと自由に芝居を創ることは出来ないか？

演劇としての、エンターティメント性にこだわり、自分で自分を締めつけて、不自由な物づくりをしている人間は沢山いるが、「何故、今、演劇なのか？」「何を表現したいのか？」ということを考え、「表現する」「提示する」ということについてこそ自分に真摯に問いかけてみれば、稽古期間や練習量だけがすべてではないことが、自ずと分かってくるのではなかろうか。

その意味で、確かに、観客に受け入れられるということは、演劇として非常に大切な要素であろうが、また逆に、観客に受け入れられない演劇というのも、非常に価値のあることではなかろうか。

そして、もっと価値のあることは、その両方の演劇が存在し、観客も自然な姿勢で、どちらの演劇にも足を運べ、批評できることではなかろうか。

まあ、理想論に過ぎないような気もするが…。毎日毎日、芝居の事ばかり考えて、少しおかしくなっているのかも…。

とにもかくにも、今の八戸地方の演劇は、全体的に迫力がない事は確かであろう。それは、人の事を批判するだけで大した活動もせず、それ故に演劇も観客も育たない状況があるからであろう。

「興味」があるなら、芝居を打ち、「興味」があるなら、情報収集し、芝居を観る事から「物語」は始まっていくような気がする、今日この頃である。

10月のFANS

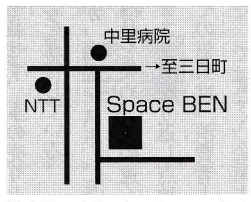
Friday **A**musement **N**egative **S**hop

■1日（第295回）「FANSプレゼンツビデオ上映会5」
■8日（第296回）「FANSプレゼンツビデオ上映会6」
■15日（第297回）「FANSプレゼンツビデオ上映会7」
■22日（第298回）「盛貴嗣ライブ1」
■29日（第299回）「盛貴嗣ライブ2」

※全て午後7時30分～、料金500円

・・FANS番外篇・・・・・・・・・・・・・・・・・・

■7日（木）19時00分開場
19時30分開演
「佐野まり」チャランゴライブ
※料金／一　　般・・・2,000円
高校生以下・・・1,000円
（当日500円増し）
※チケットはスペースベンにて販売



駐車場はございませんので、車でのご来場はご遠慮下さい。
（近くに西町書店駐車場有り）

問 スペースベン
八戸市柏崎1－11－8
☎&FAX 43－9876

FANSの番組につきましては、デーリー東北の「あすのメモ」「きょうのメモ」欄でご確認下さい。

FANSでは、役者、スタッフ、その他何でも、何かを表現してみたい人を募集しています。ご遠慮なく、ご連絡下さい。